

---

# バカとエクソシストと召喚獣《イノセンス》

きこりん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとエクソシスト（イノセンス）と召喚獣

【NZコード】

N7649Z

【作者名】

きじりん

【あらすじ】

「君たち、学校に行つてみないかい？丁度良いところがあるんだ」コムイの計らいで、初めて学校に通うことになつたアレン、神田、ラビ、リナリー。しかし彼らが通う学校 文月学園 は、ちよつと変わつた学校だつた。 バカテスの世界にDグレティーンズが参戦！そしてコムイの計らい（策略）はこれだけではなかつた！？ギャグコメディ風味、バカとエクソシストと召喚獣！！

## 【第一話】不安な呼び出し～アレン・ウォーカー（前書き）

にじファンへは初めての投稿＝ 3  
はじめまして キーリン です。

今回はクロスオーバー作品、バカとエクソシストと召喚獣を  
のんびりですが進めて行こうと思います

拙い文ですが、よかつたら読んで行ってください^\_^(ーー)^\n

## 【第一話】不安な呼び出し～アレン・ウォーカー～

ある晴れ晴れとした夏の日の廊下がり  
白髪の少年アレン・ウォーカーは、いつも一緒にいるティム・キャン  
ピーと共に室長室へ続く薄暗い廊下を歩いていた

：いかにも嫌そつこ

それと並ぶのも今から20分ほど前

食堂で山盛りの食事を田の前にして至福の時を過げていたアレン  
のもとに、任務ではない呼び出しが伝えられたことによるものだっ  
た。

「アレン、室長が呼んでいたぞ。食事が終わってからで良い  
から来い」とさ。

「任務じゃないんですか？」

「どうやら違ひがござる。俺も詳しここと聞いてないからなあ

リーバー班長から伝えられたそれは、アレンに苦く過去を思ひ出さ  
せる。

むりさん、たびたび教団を壊滅させそつこなる問題児（？）、コムイ  
がらみの事件である。

伝えに来たリーバーも、眉を八の字にして「まつたく室長は……」と  
ため息をつきそつと霧岡氣だった。

いや、言っていたかもしれない

そんな経緯で、しつかりと昼食を食べ終えたアレンは室長室へ向かっていた。

重そうな、しかしつもあけ慣れている室長室の扉の前に立ち、「いや、待てよ」と考えなおす。

「ここまでマイナスなことばかり考えてきたが、曲りなりにもコマイはここ黒の教団をまとめる人間（のはず）だ。もしかしたらこの呼び出しへ、僕とリーバー班長の予想に反して、何か（危険なことじやない）重要なことかもしれない。

そう思い、「大丈夫だよね」と頭上で羽ばたくティムキャンパーに声をかけたアレンは室長室の扉をゆっくりと押し開けた。

## 【第1話】不安な呼び出し～アレン・ウォーカー（後書き）

モーリー「お初にお目にかかります、モーリーです」

アレン「バカとHクソシステムと<sup>イーセンス</sup>戻<sup>スル</sup>獸、始まりましたね」

モーリー「<sup>スル</sup>から『バカエク』でいいよ」

アレン「なんだかその響<sup>キ</sup>も、府に落ちないのですが…まあこ<sup>ー</sup>こや。」

モーリー（良<sup>い</sup>いんだ… ^ ^ ^）

アレン「モーリー、なんで僕が後書き<sup>スル</sup>まで出てるんだあ？」

モーリー「それはね…楽しそうだから」

アレン「正直に言<sup>う</sup>つてください。どなたかを真似てるでしょ？」

モーリー「う…だつてリストペクトしてる色々な方々の小説見てて、  
やりたくなつたんだよお」

アレン「ハイマー」

モーリー「いえ、リストペクトです。」

アレン「まあ、ここです。もうこの<sup>スル</sup>と元<sup>スル</sup>をあしこめ」

モーリー「ですがアレンさん。お心が広い」

アレン「紳士ですか？」

モーリス「自分ですか…」

アレン「言わせたいのはあなたです。」

モーリス「？」

アレン「とにかく、こんな頃はどんな作者への質問、意見等があつまつた！」

アレン・モーリス「お待つけ申す…。」

モーリス（なんかそれとなべべれりとせたが…？）

## 【第一話】不安な呼び出し～神田ノウ・ラヌ～（前編）

第一話は神田視点で、お呼び出しのシーンです

ちなみに作者はログレもバカテスも

原作が手元にありません（殴

そんな中で進めているので原作丸無視や  
捏造じじいの話じやなくなりそうですが；；

…受験終わったら揃えよつかな

## 【第一話】不安な呼び出し～神田ユウ・ラム～

いつものように教団の敷地内にある森で六幻をふつていた神田ユウの「ラーム」に通信が入った。

『神田くーん、都合がいい時でいいから僕のところまで来てくれるかな?』

「何の用だ?」

キッヒ「ラームを睨み付け、声の主であるラムイに問ひ。

任務ならば任務だと、ラムイは言はずだ。

任務以外の事で鍛練を遮られた恨みのようなものが、神田の、ゴーレムの向こうにいるであろうラムイを睨み付けるまなざしに含まれていた。

『来てくれてから話すよ』

それだけ言つと、一方的に通信は切られた

しばりくそそのまま、神田の田の高をこころ「ラームを睨み付けていたが、

通信のせいで集中力が切れたのだらう。

ちつ、と舌打ちをしてから六幻を鞄にねじめた神田は高く結いあげてある彼の長い髪をなびかせて教団の建物の中へ入つていった。

「お、ユウもコマイに呼ばれたんだ?」

神田が教団の廊下を室長室に向かつて歩いて歩いていくと、ふいに背後から声をかけられた。

「俺のファーストネームを口にするんじゃねえ

ギッと神田が睨みつけた先にいたのは、赤毛で、右目に眼帯をしているラビだった。

「おお、こわ。」と、肩をすくめてさうりと神田の視線を受け流したラビは言葉を続ける。

「ところで、なんで呼ばれたか聞いてるさ?」

「知らん

「やつぱりかー

頭の後ろで手を組み、先に歩き出した神田の横を歩くラビ。神田もあせりめたようにそのままラビと共に室長室に向かった。

## 【第1話】不安な呼び出し～神田ユウ・ラビ～（後編）

きじつん「第一話です～なんとか書きました」

ラビ「でもまだ俺ら教団にいるんさね？」

きじつん「…いましばらくお待ちください」

神田「おー、テメ～勉強はじつした」

きじつん「ギクッ…だ、第一闘門（の試験）はとつあえず終わつたんだよ？」

ラビ「でも次の試験まであと20日や」

きじつん「うう…「メンナサイ」

神田「まつたく、我慢を知らねえのか？」

きじつん「お預けというものが苦手なのです…ほんとに」

ラビ・神田「「はあ…」」

きじつん「そんな一人してため息つかなくても…ただ、今頭の中にある話は出し切りたいんだよお」

神田「あきらめ「無理です（きじつん）」

ラビ「早つ…？」

きじつん「…こんなきじつんですが質問、意見などあつましたら喜んで受け付けますので」

ラビ・神田「「これからもバカとエクソシストと召喚獣をよひしへ

「や」「頼む」

きじつん「あ、長いから『バカエク』でも…い、つー？神田さん、

そんなに睨まないでください（泣」

ラビ「響きがちょっとなあ…」

## 【第二回】不安な呼び出しへコナリー・リー（前編）

実は…ついいつ暴露話は後書きにして…

今回はリナリー視点で、コマトさんに呼び出されます

## 【第二話】不安な呼び出し～リナリー・リー～

陽射しのまぶしい夏のある日

任務から帰ったツインテールの美少女リナリー・リーは、教団の室長でもある彼女の兄のもとへ向かっていた。もちろん任務の報告のために。

「ただいま、兄さん」

「おつかれり～。リナリー、怪我はなかつたかい？？」

室長室の扉をあけると、両手を広げた兄、コムイ・リーが満面の笑みで出迎えてくれた。

その兄と言つのもシスコンの中のシスコン。この文章の中で表現しきれないのが申し訳ない。

「大丈夫よ」と微笑みかけ任務の報告をする。今回はイノセンスは無い、いわゆる『ハズレ』の任務だつたが。

リナリーが一通り報告を終えると、コムイは「そうだ！」と何かを思い出したようにリナリーを見つめていた瞳をいつそう輝かせる。

「」の後また話があるから、ここに来てくれるかな？

…兄さんはちやんと報告を聞いていたのかしら。

キラキラと自分を見つめている兄の様子に、そんな一抹の不安を覚えながら「分かつたわ」とリナリーは部屋を後にした。

任務の汗を流し終え再び室長室へ向かうと、兄の姿が見えない代わりにソファーにはすでにラビと神田が座っていた。

「あら、一人とも兄さん呼ばれたの？」

「ああ。つたくあいつは自分から呼んどいてどうしちゃつつき歩いてんだ」

「きっと、またリーバー班長にでも追っかけられてるぞ。リナリーは任務帰りさ？」

「ええ。ただいま」

不機嫌そうな声色の神田と、おかえり、とリナリーに笑顔で声をかけるラビ。

神田は相変わらず腕を組んで座つたまま、扉の前にいるリナリーに顔は向かない。だが、その背中はおかえりと言つて居るよつに見え、リナリーは微笑む。

ラビがポンポンと自身の隣のスペースを示すので、それに従つてソ

ファーに腰を下ろすとそれと同時にまた、しかし遠慮がちに室長室の扉が開かれた。

「失礼します……つてあれ、コムイをなせ?」

ひょこつと顔をのぞかせたのは、白髪の少年、アレン・ウォーカーだった。

まだ来てないや、とこうラビの横で、「ちつ、モヤシもか…」とつぶやく神田の声をアレンが聞き逃すはずもなく

「なんだ、神田もでしたか」

と、今にも（恒例の）小競り合いが始まろうとしていた。だがそれは待ち人の登場によつて幸運にも（？）遮られる

「みんなお待たせへ。さあ、アレン君も座つて」

ヨツシのマグカップを持つて笑顔で現れたコムイ。

しかしその後ろで書類を持たされて（おそらくコムイのわがままに付き合わされたのであらう）疲れた面持ちのリーバー班長を、そこにいた（コムイ以外の）全員が気の毒に思つたのは言つまでもない。

## 【第二話】不安な呼び出し～リナリー・リー（後書き）

リナリー「やつと登場出来たわ。ねえ、前置きの部分長くない？」  
きじつん「そうなんですよ。本来ならすぐにでもバカテスの世界に飛ばすべき

なのですが…。『…でもログレの世界が広がってきて』  
リナリー「で、短いながらもキャラ」とに話を分けちゃつたと  
きじつん「お察しの通りで…でもやつとみんな揃いました！」  
神田「おい、前書きで述べた『実は…』って何だ？」  
きじつん「そうだった（…）それなんですがね」  
ラビ「リナリーをメンバーに入れるか迷つたって話さつ。」  
きじつん・リナリー「…!? どこからその話を」ねえ、それって本当なの？」

アレン「二人とも台詞がかぶつてますよ」  
ラビ「コマイから『僕のリナリーをメンバーに入れないなんてひどい』

つて愚痴られたさ（苦笑）」

きじつん「それ言われたんですよ、うちの中じるコマイさん…」

アレン「やつにえぱいじ、もはやネタばれしてません？」  
きじつん「…あらすじでばらしてる部分だから（まだ）大丈夫！ へへ」  
リナリー「…みんなおおぞりぱな作者だけど、質問意見は喜んで対応するらしいわ」  
ティーンズ「…バカとエクソシストと召喚獣をよじこべ」ね  
さ」頼む」

きじつん（私の中でのティーンズつて…？）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7649z/>

---

バカとエクソシストと召喚獣《イノセンス》

2011年12月25日14時48分発行